台湾における廟信仰と公権力

菊　池　秀　明

はじめに

中華世界とくに華南と呼ばれる南部地方の社会は、多くの民族が越境と衝突、融合をくり返してきた複合的な社会である。筆者は中国近代史を専門とする傍ら、華南地方の移住と民族関係に関する研究を進めてきた。近年中国国内の政治情勢が悪化し、とくに辺境地域での調査研究が困難になったため、研究対象となるフィールドを変更する必要が生まれた。そこでかねてから大陸側との比較の対象として重視していた台湾について、18 世紀末から 20 世紀までの中部地域を中心に研究を進める方針を立てた。

台湾は 17 世紀以後に漢人が入植した移民社会である。移民の出身地は多様で、福建南部の泉州、漳州から入植した福佬系、広東東部から入植した客家系に大別されるが、福建のその他の地域や広東潮州からやって来た移民もいた。日本統治時代に彼らは「本島人」と呼ばれたが、国民政府の統治が始まると「本省人」とされ、新たに国民党と共に台湾へ移った「外省人」と区別された。また台湾には漢人の入植以前にやってきたオーストロネシア系の諸民族がおり、現在は「原住民」と呼ばれている。この福佬系、客家系の本省人、外省人、原住民の 4 つを併せて「四大族群（族群とはエスニックグループの意）」と呼ぶ。1990 年代に民主化が進むと、移住の時期にかかわりなく全ての住民を包摂する「新台湾人」という概念が生まれたが、この 4 つのグループは省籍矛盾とよばれる政治的対立や経済的格差を伴いながら無視できない影響力を持っている。

いっぽう台湾は異なる政治的権力がくり返し「外挿」された地域であった[1)]。それはオランダに始まり、鄭氏（鄭成功）政権、清朝、日本そして国民政府を経て現在に至っており、台湾人自身の手になる政治的主体の確立をめざす立場からは「外来政権」と呼ばれる。台湾人の歴史はこれら異なる統治体制の中で自分たちの社会的成功の道を探し求めつつ、激しい競争と衝突、融合をくり返した苦難の道のりだった。とくに 19 世紀に平原地帯の開発がピークを過ぎると、原住民の居住区に対する浸食が進んだ。これは日本統治時代に引き継がれ、「理蕃政策」と呼ばれる厳しい統治が行われる中で、後に「台湾五大家族」と呼ばれた有力な一族を中心に樟脳生産、林業、鉱山開発などの事業が行われた。

これまでの台湾史研究は清朝時代、日本統治時代あるいは国民政府時代と統治権力が代わるたびに研究が分断され、それらの時期区分を超えて理解する視点はなかなか育たなかった。清朝時代の研究は中国史研究の範疇に属すが、中国大陸の歴史や文化に共感を寄せる研

究者の台湾史に関する関心は低かった。また日本の台湾史研究は日本史の一部として扱われたこともあって、清朝時代の台湾に関する研究はなお少ない。筆者はこうした問題点を克服するため、大陸華南地域の社会史あるいは歴史人類学的な研究方法と成果を踏まえて同時代の台湾と比較し、漢人移民の成長過程と原住民地区での開墾事業、その結果生まれた「漢蕃」関係つまり原住民との関係変化について研究を進めたい。

本稿はこれらの研究の予備調査として筆者が 2023 年 7 月に行ったフィールドトリップの記録である。主な訪問先は台北および台湾中部の彰化県鹿港鎮、雲林県西螺鎮、台中市霧峰区、嘉義市、台南市で、東部の台東を含めて約 2 週間の日程で行った。主たる調査対象はこの地の発展を担った有力移民と関係が深く、今日なお広く信仰を集めている媽祖廟を初めとする廟であり、それぞれの廟には異なる時代の公権力の痕跡が深く刻まれていた。またそれらの痕跡は台湾という社会の特質をよく物語っていると考えられる。

なお調査は台湾大学歴史系李文良教授、同大学院院生の楊朝傑氏に協力を仰ぎ、元国立故宮博物院院長で台湾大学名誉教授の呉密察氏にも同行して頂いた。以下ではその時の成果と課題を紹介することにしたい。

1. 台北大稲埕の媽祖廟と城隍廟、法主公廟

まず台北市内の大稲埕（迪化街）にある廟から話を始めたい。よく知られているように、漢人の台湾への入植は台南を中心とする南部から始まり、台北に行政中心地である府城が建設されたのは 1884 年のことだった。日本統治時代に漢人地区の商業中心地として知られた大稲埕が誕生したのは 1851 年、林藍田（福建泉州同安県人）が林益順という店舗を開いたのが始まりで、まもなく発生した移民間の武力抗争である分類械闘（頂下郊拼）に敗北した同安県人および漳州系の福佬人が淡水河沿いに店舗を構えて交易に従事したという[2)]。

現在大稲埕の北に位置する慈聖宮（天后宮）は、航海の安全を守る女性神として大陸沿海部から東南アジアにかけて広く信仰を集める媽祖を主神とする廟である。台湾各地に存在する媽祖廟と同じく、鮮やかな色彩に彩られた大殿に入ると、正面に天上聖母（即ち媽祖）、中壇元帥（民間文学に登場する仏教の守護神）など多くの神々が祀られている。また大殿の右に位置する東廂房には文昌帝君（文運を司る神で、科挙の合格祈願で崇められる）、関帝聖君（関羽のこと）、月下老人（男女関係を司る道教の神）などが、左にある西廂房には註生娘娘（女性の出産を司る道教の女性神）、観音菩薩などが祀られており、束になった大型の線香を買うとそれぞれの神位に焼香ができる仕組みになっている[3)]。

このように由来の異なる神々が共に祀られるケースは中華圏ではよく見られる[4)]。また大稲埕の慈聖宮の場合、廟と並んで有名なのが門前に並んだ老舗の屋台（小吃攤）で、古い台北の市場の雰囲気をよく伝えている。

ちなみに台北にはかつて慈聖宮とは別に、現在の二・二八紀念公園付近に最大規模の媽祖廟があった。だが日本の台湾総督府は台北新公園を作ると、1913 年に「市区改正」という

都市計画を進めて敷地内にあった媽祖廟を取り壊した。跡地の北側には「児玉総督後藤民政長官記念館」が建てられ、それが現在の台湾国立博物館であるという[5]。

第4代総督だった児玉源太郎と民政長官の後藤新平が日本の台湾統治に果たした役割についてはよく知られている。また公園の敷地には菅原道真を祀る台北天満宮も建てられた。元々この媽祖廟は清仏戦争後の1888年に初代台湾巡撫だった劉銘伝が創建したものであったといい、人々の信仰を集める宗教施設がそれぞれの時代の公権力と無関係ではなかった点に注目する必要があるだろう。なお大稲埕の慈聖宮も総督府の政策によって一度取り壊され、1914年に現在の場所に再建された。廟内には同治六年（1867年）の石柱が残っている。

台湾地図（著者作成）

さて大稲埕には慈聖宮以外にも、霞海城隍廟（1859年創建）、法主公廟（1878年創建）という二つの廟が存在する。一般に中国で城隍廟は都市（城市）の濠を守る守護神の城隍爺を祀る廟とされている。台湾も例外ではなく、伊能嘉矩『台湾文化志』は17世紀初めに清朝が台南府城、諸羅県（後の嘉義県）などに城隍廟を設け、赴任した地方官が統治の安定を祈願したことを紹介している[6]。だが霞海城隍廟

【写真1】台北大稲埕慈聖宮（著者撮影、以下同）

の創建は台北府城の成立よりも 25 年も早い。これはいかなる理由によるのだろうか。

この廟の主神である城隍爺は、大稲埕の創設に関わった福建同安県の人々が 1821 年に故郷の霞城から台湾へ持ち込んだものだった。当初この像は水運の拠点だった艋舺（万華）の八甲莊にあったが、1853 年の械闘で敗北したとき、若者たち（三十八義勇）が神像を大稲埕へ避難させた。その後城隍爺は同安県商人の陳金絨が開いた店舗（金同利糕餅店）に置かれていたが、やがて台湾水師協副将の蘇斐然（同安県人）が用地を提供し、同安県出身者の同業組合長だった林佑然らが出資して現在の場所に廟を建設したという。

ちなみに廟内には城隍爺の他に、鄭氏政権（鄭芝龍、鄭成功親子）の元武将で、清朝に投降後は同安県霞海で兵士の訓練を行った施琅の像を安置している。この廟が同郷ネットワークに基づく相互扶助組織としての性格を帯びていたことを示している。また日本統治時代に大稲埕を拠点にしていた豪商や日本の警察から金品を奪った「義賊」の廖添丁（台中県清水鎮人）が祀られているほか、城隍爺の妻である城隍夫人は取引のため外地に出かけた夫が自分を忘れないように願う妻たちの信仰を集めたという[7]。

いっぽう法主公廟の主神である法主真君は鉄観音など烏龍茶の産地として知られる福建安溪県の商人が信奉した守護神で、振南茶行の敷地に廟が創建された[8]。この烏龍茶と大稲埕の関係も興味深い。第二次アヘン戦争後の北京条約で淡水が開港されると、1865 年にイギリス商人のジョン・ドット (John, Dodd) が艋舺に代わって積み出し港の役割を担い始めた大稲埕を訪れた。この時通訳として同行したのが李春生（福建厦門人）で、彼は安溪県の烏龍茶葉を台湾へ持ち込み、台湾烏龍茶の生産に成功した。烏龍茶の輸出で富を築いた李春生は淡水河の護岸工事を行ったほか、台湾五大家族の一つである板橋林家の林維源と共に大稲埕新街市の建設などに取り組んだ[9]。

日本の統治が始まって間もない 1897 年、大稲埕には 250 軒以上の茶商がいたという。茶葉は台北県の深坑などで生産され、茶販と呼ばれる仲買人を通じて茶商に売られ、彼らが商品化したうえで媽振館が販売した。大稲埕の商業規模も拡大し、1860 年には当初の商会組織である厦郊（厦門との交易を行う商会）の金同順に加えて、艋舺で泉州との交易を担当していた泉郊の金晋順、上海や華北との交易を行っていた北郊の金萬利が合同で三郊会館（金泉順）を設立し、同安県出身者のリーダーだった林右藻を総長に選んだ[10]。林右藻は林復振などの商号で知られ、1863 年に自警団である団練を組織して李罔ら率いる海上武装集団の鎮圧に協力し、清朝から六品頂戴を与えられたという[11]。

法主公廟は元々大陸の地方信仰であったが、茶産業をめぐる商業ネットワークの中心となり、大稲埕を代表する廟として信仰を集めた点で注目される。なお法主公廟の向かいにあった天馬茶房は 1947 年の二・二八事件のきっかけとなった殺傷事件の現場として知られ、戒厳令発布後は長くこの一帯で集会などを行うことは禁止された。法主公廟も現在は五階建てのビルに姿を変えている[12]。また台湾烏龍茶の祖となった李春生は台湾長老教会の創始者としても知られ、大稲埕公学校の建設などの社会、教育事業にも取り組んだ。1896 年に彼は

初代台湾総督樺山資紀によって日本への視察旅行へ招かれ、その印象を『東遊六十四日随筆』にまとめて出版している[13]。

2. 彰化県鹿港鎮の天后宮、勅建天后宮、永安宮と城隍廟

筆者が次に訪れたのは彰化県の鹿港鎮であった。鹿港はかつて台湾米の大陸への搬出で栄えた港町である。陳盛韶『問俗録――福建、台湾の民俗と社会』に収められた栗原純氏の解説によると、元々鹿港はボラなどを扱う小さな漁港であった。だが18世紀前半に濁水溪以北の開墾が進むと、彰化県一帯で生産される米の積み出し港として注目されるようになった。台湾海峡を挟んで泉州に近かった鹿港が正式に開港したのは1784年のことで、19世紀前半には10万人以上の人口を抱える台湾第二の港町として繁栄した。住民の大多数は泉州出身者で占められたという[14]。

この鹿港の歴史を語るうえで、忘れてならないのが日茂行と呼ばれる船頭行（船客や貨物の船積みを行う業者）を経営した林振嵩一族である。林振嵩は泉州永寧街の人で、1765年に台湾へ渡った。初め彼は塩の取引を扱っていたが、やがて鹿港で船頭行を営んで日茂行を創設した。また1777年には鹿港に置かれた文官職である鹿仔港巡検王坦らの要請を受け、泉州、厦門の郊商（同業組織に属する商人）と共に「敬義園」を作り、橋の修築や遺骨の収拾、埋葬などの慈善事業を行った。さらに1787年1月に林爽文（彰化県大里杙莊人）による天地会反乱が発生すると、林振嵩は傭兵部隊である義勇を組織して鹿港を奪い返し、清軍の林爽文鎮圧に功績をあげた。

その後林振嵩が泉州へ戻ると、息子の林文濬が日茂行の経営を引き継いだ。林文濬は商業で成功を収めるいっぽう、鹿港の天后宮（媽祖廟）、塩水武廟、彰化県城の修築に出資して地域社会をリードした。また1809年には海上武装勢力だった蔡牽の鎮圧と難民の救済に貢献して四品職銜を与えられ、1816年に彰化県で発生した飢饉では「開廠施粥」の救貧事業を行って清朝から「続佐撫綏（続いて撫綏を佐けた）」の匾額（文字を刻んだ横長の大きな額）を贈られた。

続いて日茂行の経営を担ったのは3代林廷璋（林文濬5男）で、1816年に彼と姪の林世賢は揃って挙人に及第した。林廷璋も彰化県の孔子廟、鹿港の龍山寺、新祖宮（勅建天后宮）、城隍廟などの修築に参与し、地域のエリートとして大きな影響力を持った。日茂行も引き続き鹿港の商業を支配したが、1820年代に入ると鹿港は上流からの土砂の堆積などによって港湾機能に支障をきたすようになった[15]。『問俗録』は「以前は鹿港に数百隻の商船が立ち寄ったのに、現在その数は五十隻に過ぎない」（巻6、鹿港庁、海運）と記している。さらにアヘン戦争後に厦門が開港し、東南アジアから大量の米が流入して台湾米が販路を失うと、林家の日茂行も鹿港と共に衰退に向かった[16]。

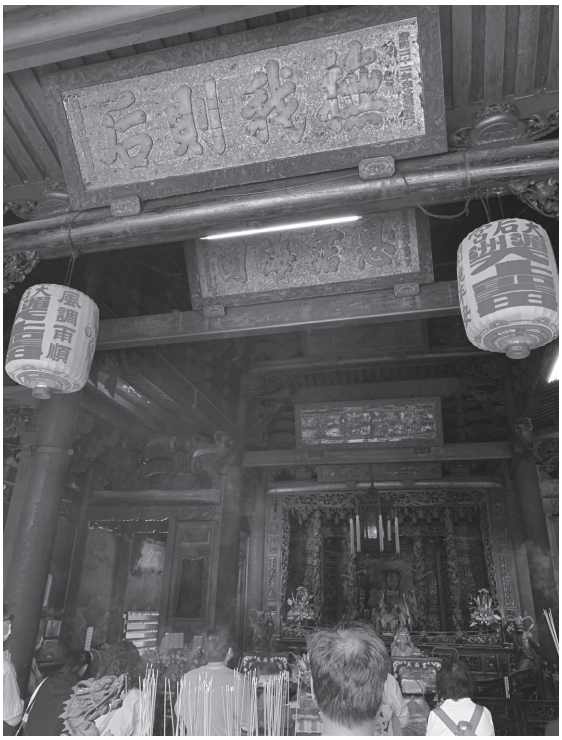
さて鹿港の廟でまず注目されるのは天后宮（旧祖宮）である。この媽祖廟の由来は清朝に投降後、福建水師提督として鄭氏政権と戦った施琅の幕僚だった藍理らが1683年に福建省

【写真 2】彰化県鹿港天后宮（旧祖宮）

湄洲にあった開基媽祖像（黒面二媽）を移して祀ったことに始まる。18 世紀初めに施世榜（泉州晋江県人、施琅の族姪）が八堡圳の水利工事を完成させ、彰化平原に多くの移民が入植して鹿港の重要性が増すと、1725 年に施世榜は現在の地に天后宮を建てた。また 1787 年に林爽文を弾圧するために軍を率いて鹿港に上陸した協辦大学士の将軍福康安（満洲鑲黄旗人）は、鹿港の海岸に官費で新たに媽祖廟を建てた。この乾隆帝勅建の天后宮は「新祖宮」と呼ばれ、従来のそれは「旧祖宮」と呼ばれて区別された[17]。

19 世紀に入ると旧祖宮の老朽化が進んだため、泉州、厦門八郊の商人たちは寄付を募って廟の修築工事を行った。現在廟内に残る「重修鹿渓聖母宮碑記」（1816 年）には次のように記されている。

> 鹿渓（鹿港のこと――筆者補足）は東寧（台湾）の巨鎮である。その街並みの北に宮があり、聖母（媽祖）を崇祀してきた。乾隆丁未（1787 年）に公中堂（福康安）が別に新宮を建てたため、人々は旧聖母宮と呼んだ。それは西側に面しており、大海がその前に広がり、樹木の茂る山が後ろに控えるなど、景色は素晴らしく威厳は明らかだった。港には船が雲集し、市場が栄えたのは、みな神明のご加護のおかげであった。
>
> 顧みるに創建から今まで百年余り、屋根の垂木、煉瓦やしっくいの多くは剥がれ落ちた。そこで泉州、厦門の各郊商が集まって咨ったところ、廟の姿形はいまだ厳かならず、妥侑（酒を勧めること）しようにも方なく、とても崇め奉ることは出来ないという結論に至った。そこで廟を新築する計画が立てられると、二つの地の郊商および船戸で力を惜しんで寄付をしない者はなかった。およそ喜んで寄付した者は紳士から庶民に及



【写真 3】彰旧祖宮に掲げられた匾

んだ。

この時建材の調達と工事の監督を掌ったのは職員の林文濬、太学生（監生）の施士簡であり、資金を集め帳簿を管理したのは泉郊の金長順、厦郊の金振順であった。またこの年の爐主（祭祀の責任担当者）は万合号の紀夢梅、海盛号の甘武略であった。嘉慶甲戌（1814 年）の秋に起工し、乙亥（1815 年）の春に完成した[18]。

ここでは旧聖母宮の媽祖が鹿港の繁栄を支える神として人々の信仰を集めていた様子が窺われる。廟の建物が老朽化し、建て替えることになったが、その中心人物（総理）になったのは日茂行 2 代の林文濬、施世榜の一族と見られる施士簡であった[19]。また修築や要地確保にかかった費用は銭 3,580 余円で、泉州郊商の金長順、厦門郊商の金振順らがこれを管理した。さらに碑文にはこの碑記を執筆した鄭捧日（1807 年挙人、原籍福建晋江県）[20]、董事として糖郊金永興、布郊金振万、油郊金洪福などの 6 名の郊商および施光昭ら 4 名の名が刻まれている。鹿港を拠点とする泉州、厦門商人が自らの手で廟の修築を進めたことがわかる。

だが廟内の祭壇の上に掲げられた匾額に注目すると様相は一変する。現在中央に掲げられた三幅の匾額のうち、最前列に位置するのは世襲靖国侯に封ぜられた施琅が立てた「撫我則后（わが則后を撫す）」匾（1683 年）であり、次に掲げられているのは林爽文を鎮圧して嘉

勇公となった福康安の「恩霑海国（恩は海国をうるおす）」匾（1787 年）である。さらに奥には乾隆帝が賜ったとされる「佑済昭霊（佑済は昭霊たり）」匾（1788 年）があり、その中央には乾隆帝自ら書いた字であることを示す「乾隆御筆之宝」の印が刻まれている[21]。

なぜ皇帝を含む清朝関係者の匾額が地方の一民間信仰である媽祖廟に掲げられたのだろうか。一般に中華圏では宗教施設や祠堂と呼ばれる宗族の祭祀施設に地元の有力者や一族出身の科挙合格者などが匾額を掲げることが多かった。地方を統治した文武官僚の名前を記した碑文が立てられることもあり、それらは地域社会における寺廟や宗族の威信を高める役割を果たした。人民共和国建国後の政治運動によって多くの歴史遺産が失われた大陸の宗教施設と比べると、台湾の廟は本来の姿を留めていると言えるだろう。

だがその点を考慮しても、台湾には清朝という公権力の権威を示す痕跡がとりわけ多い。これを端的に示すのが現在台南の赤崁楼（海神廟）の前に並ぶ九つの碑文で、乾隆帝が福康安らの林爽文鎮圧の功績を称えて作らせたものである[22]。そのうち四つは満洲文字で刻まれており、当時台湾にいた漢人が読めない満文の碑文を刻んだのは、台湾が清朝の領土であり、住民はその支配に従うべきとする統治の正統性を可視化する意図が含まれていたと考えられる[23]。

また鹿港の天后宮にはもう一枚「神昭海表（神は海表を昭かにす）」という匾額が残されている。この匾額は元々1721 年に発生した朱一貴の乱を鎮圧した福建水師提督の藍廷珍（福建漳浦県人）が雍正帝から与えられ、福建の湄洲と台南の天后宮に掲げたものだった[24]。現在鹿港にある匾額には「乾隆御筆之宝」の印が刻まれており、台南のそれとは異なるが、道光『彰化県志』は鹿港北頭の天后聖母廟（即ち旧祖宮）に「神昭海表」の匾額があったと記している[25]。この匾額は新祖宮が竣工した 1788 年頃に旧祖宮に掲げられたと見られる。

それでは清朝はなぜ鹿港に新祖宮を建立したのだろうか。福康安「勅建天后宮碑記」は「台湾は海東に僻処し、康熙壬戌（1682 年）に版図に隷入せり」とあるように、台湾が新たに清朝の統治下に入った辺境であったことから説き起こしている。福康安は林爽文らを弾圧するために「勁旅十余万」を率いて台湾海峡を渡ったが、鹿港への上陸と食糧、武器の補給、内地との連絡は「均しく虞れなしを保った」と順調に進んだ。これを見た林爽文らは「神助あるを知って」恐れをなし、「軍威は大いに振るい、向かうところ敵なし」と清軍は勝利を収めた。そして福康安は媽祖の「護国庇民の功」は明らかであり、乾隆帝の勅命を受けて廟の建設に取り組んだが、かかった経費 15,800 円のうち公費で賄えなかった 4,800 円は日茂行の林振嵩に出資させたと述べている[26]。つまり鹿港の媽祖は清朝の台湾統治に貢献した功績によって「天后に加封」[27] つまり公認されたのであり、福康安は鹿港の商人に出資させて官製の壮大な天后宮を建設したのである。

このように鹿港の新祖宮は清朝という外挿された公権力の統治を補完する役割を担った。廟内には福康安が媽祖の徳を称えた「后徳則天」の匾額が掲げられ、祭壇には「各官の禄位」[28] が並べられた。また 1792 年には祭祀の費用のために祀業が設けられ、1806 年、1834

年の二度にわたって廟の修築がなされた。汪楠「重修鹿港新天后宮碑記」によると、1806年の修築を担ったのが董事で職員だった日茂行の林文濬で、商人たちの寄付と並んで広大な敷地に立てた建物から賃貸料を取ることで経費をまかなったという[29]。

このように鹿港の天后宮が官民それぞれの宗教施設としての特徴を帯びていた事実は、後に興味深い伝説を生み出した。羅君藍「鹿港旧祖宮湄洲天上聖母神符」（1928年）には次のような記事が載っている。

> 同治年間（1862年）に戴万生（戴潮春）が乱を起こして県城を占領した。勢いは甚だ猖獗で、軍を西へ進めて鹿港を攻撃したが、翌日早朝に賊衆は戦わずに退いた。ある者がこれを賊目に訊ねたところ、「一人の女将が白い袍を身に帯びた軍隊を率いて海岸からやって来るのを見た。その軍威は人の心を寒からしめる程で、聖母が霊験を顕かにされたことを驚き知り、ゆえに撤退して帰った」と答えた。
>
> さきに戴逆（潮春）と血盟の契りを交わした者たちは、後悔して正しい道に帰りたいと願ったが、誓いに背けば天の譴責は免れないと考え、進退窮まっていた。すると聖母は大いに権能を顕わされ、扶鸞を通じて「廟の庭に清らかな水を入れた瓶を備え、神符三枚を焼いてその中に入れよ。およそ賊に従って契りを交わした者は、この水を掬って口を漱げば、罪を洗い流すことができる」とのお告げを降された。
>
> すると遠近から噂を聞きつけて廟へやって来た者は数万人を数え、争って水をすくい口を濯いだ。しばらくすると廟の庭は一面水浸しになったが、瓶の水は尽きることがなかった。人々は聖母の霊異に驚き、その過ちを正して救おうとする恩に感じ入った[30]。

ここに登場する戴潮春は彰化県四張犁の人（原籍漳州龍溪県）で、土地の所有権をめぐって台湾五大家族の一つとなる霧峰林家と争い、主として漳州系の移民宗族と八卦会（土地公会ともいう）を組織して武装蜂起した。この史料は光緒帝が旧祖宮に「与天同功（天と功は同じ）」の匾額を与えたことに触れており、戴潮春を反逆者として扱うなど清朝側の立場で書かれている[31]。また鹿港の住民は大多数が泉州系の人々で、林爽文事件の引き金となった1786年の「漳泉」械闘では漳州系の移民と対立し、戴潮春の蜂起でも団練を組織して反乱軍（紅旗軍）と対峙した。さらに赤井孝史氏は当時淡水庁に属した大甲や嘉義県の北港で媽祖を初めとする様々な「神佑」が伝えられた事実を具体的な社会関係の中から検討している[32]。

この鹿港旧祖宮の「神佑」譚は後代の作品ということもあり、当時の切迫した社会対立を必ずしも反映しているとは言えない。だが媽祖が反乱軍に参加したことを後悔している人々に救済の託宣を降したあたりに、王朝支配を正統づける使命が課せられていた官製の廟宇にはない庶民的性格が現れている。現在鹿港にある廟の中で、旧祖宮の人気が高いのは当然のことかも知れない。

続いて鹿港で訪問したのが永安宮と城隍廟であった。鹿港の永安宮は元々台湾水師協の北頭営盤（陣地）があった場所で、1765 年に薛府王爺（唐代の白袍将軍薛仁貴）を祀る廟として建てられた。王爺は台湾南部を代表する神であるが、この廟の特徴は 1795 年に発生した陳周全の乱で戦死した遊擊の曽紹龍を共に祀っていることで、清朝官服姿の「曽老大爺」像が置かれている。またここは鹿港の全ての住民が信奉する「閣港廟」の一つに数えられ、1839 年には「閣港衆弟子」の名義で「徳及生民（徳は生民に及ぶ）」匾が掲げられた[33]。

いっぽう城隍廟は鰲亭宮とも呼ばれ、その由来には 2 説ある。一つは 1754 年に泉州晋江県の石獅郷から「分香」してもたらされたという説で、鹿港で「日興行」を営んでいた高姓の泉州永寧県商人が荷物を奪われ、故郷へ戻って城隍神に祈願したところ、犯人が捕まったためにこの神位を鹿港へ留めたというものである[34]。もう一つは 1839 年に林日茂行と地方の士紳が泉州永寧県（鰲城）から城隍神を迎えた[35] とするもので、いずれにせよ台北の霞海城隍廟と同じく城市の守護神ではなく民間の神として迎えられたことが特徴となっている。永安宮の場合と併せて、台湾の廟信仰と公権力の複雑な関係性を物語っていると言えよう。

鹿港で最後に訪れたのは丁家と辜家の住宅だった。丁家は泉州のムスリム商人の子孫で、19 世紀前半に丁樸実が台湾へ来て商業を営んだ。息子の丁克家は船頭行を設立して「協源」号を名乗り、鹿港の五福大街に住んだ。三代目の丁醴澄は 1880 年に殿試を受験して賜同進士（進士及第に次ぐ名誉学位）となった[36]。やがて丁家は人口が増えたため、新たに店舗を購入して「新協源」を名乗ったが、日清戦争後に台湾が日本へ割譲されると主要な成員は大陸へ戻ってしまい、丁家の影響力はいったん低下したという[37]。

また鹿港辜家（即ち辜顕栄一族）は台湾五大家族の一つで、その住居は現在鹿港民俗文物館となっている。辜家は元々泉州恵安県の人で、辜礼歓は英領マラヤのペナンで華人のリーダーとなり、2 代辜安平の時に鹿港へ移住した。だが辜氏が台頭のきっかけをつかんだのは、4 代の辜顕栄が台北の艋舺で雑貨店「瑞昌成」号を開いてからである。1895 年に日本軍が基隆に上陸すると、辜顕栄はその先導役を務めて台北に軍を入城させた。日本の信頼を勝ち取った辜顕栄は台北保良局局長となり、総督府の援助を受けて塩、砂糖、アヘン、樟脳などの専売権を握り、鹿港や台中の二林、南部の屏東県で開墾事業を進めて財産を築いた。また 1920 年代の台湾議会設置請願運動には台湾公益会を設立して反対の立場を取り、「漢奸」あるいは御用商人との批判を浴びた[38]。

現在台北の大稲埕埠頭には辜顕栄が建てた住居（辜宅）が残っている。鹿港の辜家住居はバロック風と閩南式の折衷建築で、1919 年に完成した。その内部は壮麗で、1953 年に南投県国姓郷の佃人（小作人）たちが辜偉甫（辜顕栄 6 男）に贈った「護佃定邦（佃人を護って邦を定めた）」の匾額が掲げられており、地主階級の打倒をめざす「革命」が行われなかった大陸との違いに驚かされた。

このように丁家であれ、辜家であれ、台湾の人々は入植後も移動をくりかえすことで成功

【写真 4】雲林県西螺鎮福興宮

のチャンスをつかんだと言えよう。

3. 雲林県西螺鎮の福興宮、嘉義県新港の奉天宮と呉鳳廟

鹿港での調査が終わると、筆者は雲林県の西螺鎮へ向かった。途中急流で知られる濁水渓に架けられた西螺大橋を渡ったが、この橋は日本統治期に橋脚の基礎が築かれ、アメリカの支援（美援）を受けて 1952 年に完成した。長さは 1,939 メートルあり、当時アジアで最長の橋だった。1954 年に作られた観光地図「台湾指南挿画図 (Illustrated map of Taiwan)」にはこの橋が描かれており、国民政府の台湾統治を海外にアピールする存在だったことがわかる[39]。

清朝時代の雲林は嘉義県に属し、斗六門（現在の斗六市）に巡検衙門が置かれていた。西螺鎮の福興宮（旧街媽祖廟）は 1721 年の創建で、福建湄洲からもたらされた媽祖像を祀ったのが始まりという[40]。現在福興宮は台中の大甲にある鎮瀾宮の媽祖像が毎年元宵節に嘉義県新港の奉天宮との間を往復する媽祖巡行（大甲媽祖遶境進香）の経由地として知られている。この媽祖巡行は元々大甲から福建湄洲へ「進香」のために赴く行事であったものが、1913 年に台湾総督府が台中大安港を廃止したために、南下して雲林県北港の朝天宮（1693 年創建）へ向かうようになった。現在は大甲と新港間、往復 340 キロを 9 日かけて巡り、約 30 万人が参加する台湾を代表する宗教活動となっている[41]。

西螺福興宮にも 1770 年に「首事」の廖尚徳らが立てた「莫府尊親（親を尊ばざる莫かれ）」匾[42] など多くの歴史遺産が残っている。なかでも注目されるのは 1833 年に北路協副将の葉長春が与えた「好義従風（義を好み風に従う）」匾である。そこには次のような文章

が刻まれている。

道光壬辰年（1832年）の冬に逆賊張丙らが嘉義城で乱を起こした時、本協鎮（葉長春のこと）は親しく隊伍を率いて剿禦に向かった。義勇を召募し、共に仇を討とうとしたところ、なんじら西螺、布嶼保の鍾、廖、李、林および各姓の人々が知らせを聞いて雲集し、鎧を執り鞭に従い、軍と共に守禦に努めた。先を争って勇を賈った姿は、殊に嘉尚するべきである。いま反乱の平定にあたり、ここに数語を額に撰んでなんじらの善願を世に知らしめることとする。なんじら同郷の者たちは敦く名教を尊び、永く苞桑（根本のこと）を固めれば、太平の福を享することは極まりない[43]。

この文章は1832年に嘉義県で発生した張丙の乱にあたり、西螺の鍾、廖、李、林各姓からなる「義勇」が清軍を支援して反乱軍の攻撃を退けたことを記念して記されている。この義勇は義民とも呼ばれ、反乱が頻発した当時の台湾で正規の科挙合格を見込めなかった移民一族が、反乱軍鎮圧の「軍功」を立てることで政治的成功を図った上昇戦略であった[44]。

張丙の乱では西螺鎮の南側にある土庫街までが張丙軍に占領され、西螺鎮が陥落すれば鹿港や彰化県城も脅威にさらされたため、義勇の参戦は戦況を左右する重要な意味を持った[45]。また義勇を組織した廖姓は漳州府詔安県出身の移民で、張丙軍の主力を占めた福佬系とくに漳州系移民と同郷関係にあり、一つ間違えれば「逆賊」と見なされて清軍の弾圧を受ける危険もあった[46]。実際に霧峰林家の始祖林石（漳州府平和県人）は林爽文が蜂起すると、入植先だった大里杙荘を清軍に攻め落とされ、財産を没収され失意の中死んでいる[47]。つまりこの匾額は反乱軍鎮圧における義勇の功績を王朝政府に認めさせることで、彼らが「太平の福」を享受する資格を持った「民」であることを保障する役割を果たしたと言えよう。

ところで嘉義県新港にある渓北六興宮にも興味深い匾額が現存している。それは「水徳増光（水徳は光を増す）」と記された匾で、1839年に福建水師提督、浙江提督を歴任した王得禄が贈ったものである[48]。王得禄は諸羅県溝尾（現在の嘉義県太保市）の人で、朱一貴の乱を平定するために台湾へやってきた軍人移民の子孫だった。祖父が諸羅県に定着し、父親の王必敬は監生の資格を獲得した。王得禄の兄は生員となり、彼自身は武学堂で武芸を学んだ。

1786年に林爽文が蜂起すると、王得禄は台南の台湾府城に救援を求める連絡役を務め、反乱軍としばしば交戦して下士官である把総に抜擢された。福康安が台湾に上陸すると、王得禄は清軍と共に諸羅県城の包囲を解き、林爽文の拠点だった大里杙の攻撃で活躍して候補千総となった。また1806年に蔡牽の率いる海上武装勢力が台南の鹿耳門（現在の安平港）へ進攻すると、王得禄はこれを破って福寧鎮総兵に任ぜられた。翌年浙江提督の李長庚が戦死すると、王得禄は彼の代理として蔡牽集団と戦い、1809年には福建水師提督に就任した。1820年に王得禄は浙江提督となったが、当時台湾における武官の最高位は台湾鎮総兵であ

【写真 5】嘉義県新港渓北六興宮の黒面媽祖像と王得禄の匾額

り、彼は台湾の現職武官を超える官位を手に入れたことになる[49]。

王得禄の長い軍人生活の中で残した匾額は 18 件にのぼる。その多くは地元の嘉義県や台南の寺廟に掲げられたもので、太保市には 3 枚の匾額が残されているという。なかでも王得禄が重視していたのは新港奉天宮、北港朝天宮および渓北六興宮の三つの廟で、現在一本の木材から造られた三尊の「黒面媽祖像」をそれぞれ安置している。王得禄はこれらの廟の修築に関わり、初め奉天宮、朝天宮にそれぞれ一尊ずつ媽祖像を安置し、残る一尊を渓北にあった提督公館に持ち帰ったが、彼の死後に渓北六興宮へ移されたという[50]。蔡牽との海上の戦いで目を患った王得禄は、航海神である媽祖の加護を強く望んだと伝えられる。こうした願いを地域社会と王朝政府を結びつける「公共圏 (Public sphere)」というべき廟で表明したところに、社会的上昇のための厳しい競争を勝ち抜いた王得禄の特徴が現れていると言えよう。

なお王得禄の長男である王朝綱は 1825 年に挙人に合格して広東の知府となり、九男の王朝文は日本統治時代の嘉義県参事や嘉義銀行の頭取を務めたが、繁栄は長く続かなかった[51]。彼の死後に「軍功」によって提督職まで上りつめたのは霧峰林家の五代林文察であり、この地域の政治的、経済的影響力も彼らによって握られることになる。

さて筆者が次に訪ねたのが嘉義市であった。「嘉義」とは 1787 年に林爽文が鎮圧された時、諸羅県の義民が 10ヶ月におよぶ籠城戦を持ちこたえたことを乾隆帝が知り、その「義を嘉して」与えた地名である。市の中心部は日本統治時代に建設が進められ、東の阿里山からは森林鉄道が台湾ヒノキ（内地の神社建材に用いられた）を運び、西は新港、北港を経て雲林県虎尾鎮に至る糖業鉄道がサトウキビを輸送する物資の集散地だった。映画『KANO』

【写真 6】嘉義県呉鳳廟

に登場する「噴水」は嘉義駅から東へ延びる中山路（旧栄町通り）にあり、当時のエースだった呉明捷投手の像が立っている。噴水の脇にあるのが嘉義名物鶏肉飯の老舗「噴水鶏肉飯」本店で、夜には南へ向かって夜市が賑わっていた。

日本統治時代の風景が色濃く残る嘉義市内であるが、よく見ると清朝時代の痕跡が見いだされる。嘉義公園（かつての嘉義神社所在地）の敷地に置かれた「福康安紀功碑」（1788年）はその一つで、乾隆帝の命によって彼は生きながら「生祠」で祀られることになった。その時作られたのがこの碑文で、満漢二文字で彼の功績を「国のために民を愛した」[52] と称えている。初め碑文は県城東門近くの福康安生祠にあったが、1906 年の地震後に新栄路へ移され、さらに公園内へ移動したという。また嘉義市内には林爽文との戦いで死んだ李甲ら 18 名と 1 匹の犬を祀った「忠義十九公廟」がある[53]。

今回の調査で筆者が最も訪ねたいと考えていたのが嘉義県中埔郷の呉鳳廟である。呉鳳は原住民居住区と漢人地域との境界で双方の橋渡しをする通事を担当していた人物で、1769 年にツォウ族（鄒族）によって殺されたとされる。

この呉鳳は死後、とくに日本統治時代に入って「自分の生命を犠牲にして出草（首刈り）の習俗をやめさせようとした偉人」として顕彰された。社口村には呉鳳廟が建設され、呉鳳の物語は尋常小学校や公学校の国語教材として日本人、漢人、同じく日本統治下にあった朝鮮人児童の教育に用いられた。国民政府もその内容を踏襲し、1952 年に蔣介石は「舎生取義（生を捨てて義を取る）」[54] と記した扁額を廟に贈った。1980 年代に入るとその差別的な内容に原住民から反対の声があがり、1989 年に呉鳳の物語は教科書から削除された。

この呉鳳伝説の誕生、変容とその影響については駒込武氏、下村作次郎氏、宮岡真央子氏

をはじめとして日本、台湾で多くの研究成果があり[55]、筆者がここで付け加えるべき内容は多くない。だが伝説の背景となる「漢番」関係つまり漢人の原住民地区への入植とその結果発生した対立の激化については、なお検討すべき問題が残されているように思われる。

そこで陳盛韶『問俗録』に注目すると、呉鳳が担当した通事について以下のような興味深い史料がある。

> 帰順した番社には通事、土目という役職を設け、彼らには辛労租穀（労に報いる米）を支給する。通事は社内の行政を独裁している。通事がいない場合には、土目が統治して番社を保全し、統制してきた。しかし、このごろでは通事、土目が番社の厄介者となりはじめている。
>
> 各番社の口糧は（人数で割り当てた食糧）は多い者で数千文、少ない者で数百文である。すべて通事、土目が官の発行した証明書に捺印した後に佃戸から徴収し、戸口を考慮して番社の構成員に均分する。ところが通事、土目は［口糧から］金を借りて計算が合うようにするために、規定額を減らして計算する。あるいは番社の丁数を偽って少なく報告してしまい、口糧を無に帰してしまう。
>
> 番社にはまた正供（土地税）、採買（政府による米の買入れ）の負担があり、祭祀の際の協議の勝利者に贈られるほうび、祖先祭祀のための芝居、教師の招請費、庁・県などの役所の役人の出張費などもまた番大租（番社に支払われる大租）から調達した。番大租は銭に換算して納めさせた。この銭の出納は全て通事、土目が管理しているので、彼らはまたその地位を利用して租をかすめとり、番社の構成員には実際の支出よりも多く支出したように報告する。従って通事・土目の得る利益は最も厚い[56]。

ここで陳盛韶は通事と土目を中国周辺地域で見られた間接統治（土司と呼ばれる世襲官吏による周辺民族統治）の担い手と見なしているが、それは必ずしも正確な理解とは言えない。もともと通事は「番社」に対する税の徴収を請け負い、原住民との交易を独占していた「社商」の代理人で、漢人ながら原住民の言語に習熟し、原住民の代わりに役所と交渉したり、土地をめぐる取引での立ち会いや訴訟の審理などを行っていた[57]。事実呉鳳は漳州府平和県から入植した漢人の移民であり、通事就任前の 1719 年に彼は「夥長」即ち墾首として阿里山の土官と契約を結び、ツォウ族のロモサナ社が所有していた番仔潭（現在の竹崎郷鹿満村付近）を借り受け、これを入植した漢人に小作させている[58]。史料中に見える番大租がこれで、呉鳳は佃戸から徴収した小作料をツォウ族に渡していた。陳盛韶は通事が往々にしてこれらの金を着服し、原住民に渡さなかった弊害を指摘しており、この論理に従えば呉鳳は「奸商」であったために原住民の恨みを買って殺されたことになる。

しかし『問俗録』は先の部分に続けて次のように述べている。

それでは通事、土目は富裕なのだろうか？ところがそうではないのだ。というのは、番社において通事、土目を解任する場合には、番社の構成員全体が解任に同意しなければならず、通事、土目を選出する場合も番社の構成員全体が推薦することを必要とする。生番は愚鈍で無力であるために、通事、土目としての職務を果たすことができず、必ず狡猾な漢人が代理をつとめ、その機構の中に入り込んで食い荒らし、官印を手に入れて利益をむさぼる。生番の通事、土目はただ名義だけの役職として官吏と会見し、一年に辛労穀若干を受け取るだけである。

そのうえ生番には信義がなく、誰かに一杯の酒を飲まされると、その人物を通事、土目として選び、官に申請する。そのため往々にして、ある年に選出された者が次の年には解任されるという具合に、選出と解任をつぎつぎとくり返して止む時がない。番社内の必要経費は全て公田の口糧租から調達される。そのため番社内の公田はまず抵当貸し、ついで不動産を抵当とする貸借が行われ、最後は債権者が抵当となった土地を売却する。こうして口糧は日に乏しくなり、番社は日に貧窮していく。これは通事、土目が害をなすのである[59]。

当時陳盛韶が勤めた鹿港同知の管轄範囲は阿里山、水沙連などの原住民居住区を含んでおり、彼は1年に2度屯田兵に俸給を与えるために嘉義県内の「漢番」交界地域を巡っていた[60]。1722年に通事となった呉鳳は1769年に殺されたが、『問俗録』が記されたのは1833年で、これまで呉鳳関連の史料として挙げられてきた劉家謀『海音詩』（1851年）や光緒『雲林県採訪冊』（1894年）に比べれば、事件当時の情況をより反映していると考えられる。

この前提に立って史料に注目すると、現在竹崎郷義仁村に残る呉鳳の屋敷（呉鳳故居）は前に牛稠渓が流れる高台に位置する風水の良い場所にあるが、彼の子孫は四甲の耕地を受け継いだに過ぎなかったといい、鹿港の富豪のように広大な耕地を占有していた訳ではない。呉鳳の家も一進のささやかな規模で、戴潮春反乱参加者の所有地を「逆産」として没収した霧峰林家の壮麗な屋敷や庭園には遠く及ばなかった[61]。

次に注目されるのが原住民居住区への進出を図る「狡猾な漢人」がもたらす様々な弊害であった。現在嘉義県文献委員会には通事となった呉鳳が1760年に自ら署名した二枚の契約書が残されている。それによると、1752年に番路郷石頭埔に数百甲の森林を所有していた張禄は、当時ツォウ族の居住地だった埔尾山の東側に「漢番」の交界を置くことを求めた。だが呉鳳はこれまで通り埔尾山の山頂を境界とするように主張して争いとなり、訴訟は8年間に及んだ。最後は調停が行われ、埔尾山の西南を境界とすることになったという[62]。

実のところ、呉鳳が通事を担当していた48年間に阿里山麓の「漢番」交界は漢人の入植によって東へ後退せざるを得なかった。1722年に設けられた土牛紅線（土塁を設け、監視の兵士を置いた境界のこと）は通事の詰所があった社口村の西を通っていたが、1768年に引き直された境界線は太平山背（現在の梅山郷太平村）まで移動したという[63]。この翌年に

【写真 7】嘉義県呉鳳故居に掲げられた「脩扞于艱」匾（1801 年）

呉鳳は殺害されるが、くり返される漢人の越境行為やツォウ族の「狩場」としての土地に対する愛着を無視した開墾事業は、ツォウ族の激しい反発を引き起こしたのは間違いない[64]。

それでは誰が呉鳳を殺したのだろうか。近年の調査で手を下したのは山美社のツォウ族青年 Tosuku であったと言われている[65]。だが先の史料を見る限り、彼の死の最大の受益者は通事を利用して「利益をむさぼる」ことを願った漢人移民であったと思われる。なぜなら原住民の信望が篤く、通事としての経験が豊富だった呉鳳を排除すれば、自分たちの意のままになる人物を通事に選ばせることが可能になるからである。

ただしこの時漢人移民は、原住民に「一杯の酒を飲ませ」て殺害を依頼するような直接的な方法を取らなかった。代わりに彼らは毎年呉鳳を通じてツォウ族に納める筈だった小作料の納入を 3 年間拒否し続けた。その結果ツォウ族は「口糧は日に少なくなり、番社は日に貧窮していく」とあるように困窮し、呉鳳が通事の地位を利用して小作料を着服しているという不満をつのらせた。そして Tosuku は「三年目も小作料が手に入らなかったら、自分の首であがなう」という呉鳳の言葉に応じる形で、彼を殺してその首を取った。だが後になってツォウ族は呉鳳が漢人から小作料を受け取っていなかったことに気づき、「漢人に報復するつもりが、誤って呉鳳を殺してしまった」という語りが生まれたと見るべきだろう[66]。

また呉鳳の死後に彼を祀る廟が建てられ、彼が原住民の襲撃から漢人を守ろうとして犠牲になったという伝説が生まれた理由は何だろうか。そこで呉鳳故居に残る匾額（1801 年）に注目すると、中央には「脩扞于艱（艱難にあって守りを脩める）」と刻まれ、右には嘉義県知県、台湾北路協左営都司など文武官員の名前が、左には「嘉慶六年辛丑仲秋月穀旦、□首呉奇玉立」とあるように匾額を作った呉奇玉（呉鳳の孫）の名前が記されている。また安

【写真 8】嘉義県呉鳳故居の呉鳳像

置された呉鳳像は甲冑に身を包んだ騎馬姿で、右手に高く剣をかかげており、紅衣に身を包んで進んで自らの命を差し出した呉鳳廟の絵図とは全く異なる。さらに像の脇に置かれた位牌には「遠祖元輝諱鳳之神位」「皇清顕考秉禎公呉府君神位」[67] とある。19 世紀初めには呉鳳の神格化が始まっていたことがわかるが、「慰霊」の対象となった呉鳳の憤怒――ふりかざした剣は怒りの大きさを示しているように見えた――が彼の死後疫病の流行に苦しんだツォウ族に向けられていたのか、それとも彼を死地に追いやった漢人移民に向かっていたのかは明らかではない。

古来、中国では非業の死をとげた犠牲者を聖人あるいは烈士として顕彰し、政治利用することがくり返されてきた。本稿が取り上げた廟信仰の崇拝対象も、こうした文脈とは決して無関係ではない。1820 年代以後、台湾では水沙連（南投県から埔里鎮、日月潭一帯）の開墾の是非について議論が戦わされた[68]。開発か、封禁かというジレンマを抱えた清朝の台湾経営にあって、呉鳳伝説は漢人移民の「内山」地区への入植をめぐる地方政府の「黙認（事実上の開墾奨励）」政策に大きな変更はないことを広く伝える役割を果たした。

現在呉鳳の故居には、1912 年に第 5 代の台湾総督佐久間左馬太が立てた「煞身成仁（身を殺して仁を成す）」と刻まれた匾額が残っている。これら廟信仰が果たす政治的効果の大きさを日本の台湾総督府や国民政府もよく知っていたのであり、だからこそ人々に「滅私奉

公」[69] を強要する体制イデオロギーの宣伝媒体として呉鳳を利用したのだと言えるだろう。

おわりに

以上、今回の調査での見聞を手がかりに、台湾における廟信仰と公権力との関係について考察してきた。廟などの宗教施設が地域社会と公権力を結びつける空間となる現象は中華圏に限らず広く見られるが、台湾の場合清朝という 17 世紀に新たに「外挿」された王朝権力の権威を示し、その統治の正統性を主張する様々な痕跡が残されている点が突出した特徴となっていた。むろん本来は城の守護神である筈の城隍神が地方の民間信仰として伝えられるなど、移民中心に開発が進んだ台湾ならではの現象もあった。また大陸との流通の窓口で、清軍の上陸拠点でもあった鹿港に商人たちの手になる媽祖廟（旧祖宮）と「勅建」の官製媽祖廟（新祖宮）という二つの廟が存在したことは、廟信仰と公権力をめぐる複雑な関係を浮かび上がらせた。さらに媽祖廟の中には王得禄のように軍事的功績をあげて政治的な上昇を図った移民一族が庇護を求めた例や、「義勇」を組織して政府軍に協力することで弾圧を免れようとした人々に地方政府が「太平の福」を約束する扁額も存在した。

これら国家と社会のさまざまな思惑が入り交じった主張が交叉する場として注目されるのが、いまも嘉義県に残る呉鳳廟であった。日本統治時代に「自らの死をもって原住民を教え導いた偉人」として顕彰され、国民政府もその政治的効果を活用した呉鳳伝説であったが、実際のところ呉鳳は漢人の原住民地区への入植を押しとどめることができず、「漢番」対立の犠牲となった人物と見る方がふさわしい。彼の神格化は漢人による原住民地区への越境と入植、開墾の諸政策に変更がないことを宣伝する地方政府によって始められたが、やがて後藤新平らの注目するところとなり、台湾のみならず日本内地、同じく日本の植民地統治を受けた朝鮮においても「滅私奉公」の宣伝媒体として活用された。東アジア世界において宗教信仰は常に国家から「公認」を受けるか、「邪教」として弾圧を受けるかの二者択一が求められていると言えるだろう。

最後に台南から台東へ向かった筆者は、それまで当たり前のように視界に入っていた廟の数が減ったことに気づいた。原住民が多いこの地域ではキリスト教が浸透しており、あちこちに教会堂が目についた。花蓮にかけては日本人が入植した地域も見られるが、これらの地では日本統治時代の神社が寺廟として転用されている例があると聞いた。廟信仰から見ることのできる台湾社会とは、台湾という全体像の一部であることに留意すべきだろう。

註

1) 若林正丈、家永真幸編『台湾研究入門』V-1、若林正丈「「台湾という来歴」を求めて」（東京大学出版会、2020 年、345 頁）。
2) 維基百科（台湾版 Wikipedia）、大稲埕および大稲埕歴史声音、1851 年林五湖古厝：迪化街開端 (https://sidoli.tw/stories/65)。

3) 2023 年 7 月訪問記録および維基百科、大稲埕慈聖宮を参照。
4) 例えば台北南部の木柵にある指南宮（ロープウェイの駅がある）は中国の民話に登場する「八仙」の一人である呂仙公を祀り、扶鸞信仰と呼ばれるシャーマニズムで栄えたが、現在は儒教、仏教、道教の神々を共に祀る聖地になっている（2023 年 4 月訪問記録）。
5) 維基百科、二二八和平公園。
6) 伊能嘉能『台湾文化史』中巻、第七篇、特殊の祀典及信仰、第一章、城隍廟の崇敬（刀江書院、1960 年、385 頁）。
7) 2023 年 7 月訪問記録および台北霞海城隍廟 (http://www.tpecitygod.org/jp-about-xia-hai01.html)。何義麟「台湾人の歴史認識 「御用紳士」辜顕栄と「抗日英雄」廖添丁」『アジア遊学』48 号、2003 年。
8) 維基百科、台北法主公廟。
9) 陳慈玉「買弁から資本家へ：日本統治期台北・大稲埕の李家」『立命館経済学』第 63 巻：第 5・6 号、2015 年 3 月。
10) 伊能嘉能『台湾文化史』下巻、第十二篇、商販沿革、第一章、郊行（刀江書院、1960 年、7 頁）また「茶・茶語録、台湾茶、其の四十」（有）リーディングサカイ　茶網 (http://www.leading-sakai.co.jp/chinese_tea/chatekikoji/)。なお日本の統治が始まると、日本の商社が洋行の勢力を排除し、大稲埕の商業も烏龍茶の製造、販売から漢方薬、布の卸業へ姿を変えたという。
11) 維基百科、林右藻および大稲埕紀行、「林復振商行」郊商領袖林佑藻 (https://web.archive.org/web/20190602150912/http://tophome1929.tw/?p=347)。
12) 2023 年 7 月訪問記録および維基百科、台北法主公廟。
13) 陳俊宏『李春生的思想與日本観感』臺北、南天書局、2002 年。
14) 陳盛韶著、小島晋治等訳『問俗録――福建、台湾の民俗と社会』所収の栗原純「清朝統治下の台湾」（平凡社、1988 年、233 頁）。栗原純「清代中部台湾の一考察――彰化地方における一田両主制をめぐる諸問題」『東洋学報』64 巻 3、4 号、1983 年。また道光『彰化県志』巻 2、規制志、街市には「鹿港大街：街衢縦横皆有、大街長三里許、泉、厦郊商居多、舟車輻輳、百科充盈。台自郡城而外、各処貨市、当以鹿港為最」とある。
15) 2023 年 7 月訪問記録および陳仕賢「鹿港日茂行內解說牌」林振嵩、林文濬、林廷璋。
16) 陳盛韶『問俗録――福建、台湾の民俗と社会』130 頁および栗原純「清朝統治下の台湾」。ここで栗原氏は大型船が入港できなくなった鹿港では竹を編んで作った筏が付近の港や沖合の船との間を往復し、鹿港の商業活動を支えたと述べている（同書 245 頁）。
17) 2023 年 7 月訪問記録および国家文化資産罔、鹿港天后宮 (https://nchdb.boch.gov.tw/assets/advanceSearch/monument/20191128000001)。施世榜の八堡圳建設については森田明「台湾における一水利組織の歴史的考察――彰化県「八堡圳」について」『福岡大学人文論叢』4-3、1972 年（のち同『清代水利史研究』亜紀書房、1974 年所収）、施世榜一族の歴史については黄富三『台湾水田化運動先駆――施世榜家族史』国史館台湾文献館、2006 年をそれぞれ参照のこと。
18) 重修鹿渓聖母宮碑記、鹿港天后宮内に現存。またその一部内容は国立中央図書館台湾分館編『台湾記憶』典藏資源、史料集、台湾碑碣拓片、重脩鹿渓聖母宮碑記に収められている (https://tm.ncl.edu.tw/)。
19) 維基百科、施世榜によると、彼は 6 人の妻妾に 9 人の男子を産ませたが、その中に施士簡の名前はない。ただし施世榜の息子の世代は「士」字輩で統一されており、恐らく施士簡は施世榜の族姪に当たると思われる。また蔡士展「清代鹿港功名人物拾遺」『台湾文献』68 巻 3 期による

と、施士簡は 1818 年の「敬義園捐題碑」にも名前が見えるという（国史館台湾文献館、https://www.th.gov.tw/new_site/401068304）。

20) 道光『彰化県志』巻 8、人物志、選挙。また蔡士展「清代鹿港功名人物拾遺」によると、鄭捧日は鹿港が生んだ最初の挙人で、日茂行の林廷璋、林世賢がこれに続いた。

21) 2023 年 7 月訪問記録。また調査に先立ち、楊朝傑氏が匾額の写真や関連文献を収めた「清代台湾動乱事件歴史田野調査手冊」を作成して下さった。それによるとこの匾額は 1952 年に鹿港鎮長の陳培熙が新祖宮から移したものであるという。記して感謝したい。

22) 2023 年 7 月訪問記録。また 9 枚の碑文（贔屭亀趺御碑）は御製平定台湾二十功臣像贊序、御製福康安奏報生擒莊大田紀事語碑、御製剿滅台湾逆賊生擒林爽文紀事語碑、御製平定台湾告成熱河文廟碑（共に満文、漢文 1 枚ずつ）、命于台湾建福康安等功臣生祠詩以志事碑（満漢文 1 枚）からなり、文化部国家文化記憶庫 (https://memory.culture.tw/) で閲覧することができる。

23) 清朝の影響力を示すために匾額が掲げられた事例として琉球王国の御書楼がある。そこでは歴代皇帝が与えた匾額だけでなく、勅封使の額も同時に掲げられた（劉罰「清冊封琉球散逸史料『（冊封）琉球国記略』（『海国記』か）」（『沖縄大学人文学部紀要』第 25 号、2022 年 3 月）。以上は水盛涼一氏の教示による。記して感謝したい。

24) 2023 年 7 月訪問記録および維基百科、大天后宮。なお同廟内には藍廷珍の「神獣征異」匾（1723 年）が雍正帝の「神昭海表」匾（1726 年）が掲げられていたが、1818 年の火災で焼失し、現在掲げられているのは複製品という。また祭壇近くの柱にはアヘン戦争期の台湾道だった姚瑩が記した対聯（1840 年）が刻まれている。

25) 道光『彰化県志』巻 5、祀典志、祠廟。

26) 道光『彰化県志』巻 12、芸文志、記。なお同書巻 7、兵防志、列伝、福康安および巻 11、雑識志、兵燹によると、この時福康安が率いたのは巴図魯、侍衛 120 名と兵 9,000 名だったとある。また上陸作戦は 1 日で完了したと言い、当時の鹿港の規模の大きさが窺い知れるという（栗原純「清朝統治下の台湾」）

27) 道光『彰化県志』巻 5、祀典志、祠廟は媽祖について「国朝康熙中、屢著霊応、紀功加封天后、入祀典。雍正四年、御賜「神昭海表」額。十一年、賜「錫福安瀾」匾、令江海各省、一体奉祠致祭。后英霊溥済、廟遍薄海。今就官所致祭、朔望祇謁者紀之」とあり、1720 年代以降の沿海各省で政府主導による媽祖の祭祀が行われたと述べている。なお宋代から清代に至る媽祖と公権力の関係については平木康平「媽祖と観音――中国母神の研究（二）」『大阪府立大学紀要（人文、社会科学）』32 号、1984 年。

28) 2023 年 7 月訪問記録。道光『彰化県志』巻 5、祀典志、祠廟。なお同書によると、当時彰化県にあった他の媽祖廟のうち、県城北門にあったものは北路協副将が、東門のものは彰化県知県がそれぞれ建てたものだった。また県城南門外の媽祖廟は乾隆年間に「士民」が建てたもので、「歳往笨港進香、男女塞道、屢著霊応」とあるように後述する媽祖巡行で繁栄したという。

29) 2023 年 7 月訪問記録。道光『彰化県志』巻 12、芸文志、記の金棨「新天后宮祀業記」および汪楠「重修鹿港新天后宮碑記」。ちなみに後者は戦乱で焼失した鹿港同知の役所が新祖宮の西隅に置かれていたと記している。

30) 羅君藍「鹿港旧祖宮湄洲天上聖母神符」（楊朝傑「清代台湾動乱事件歴史田野調査手冊」7 頁）。この史料は天后宮に保存されていたもので、施文炳著、洪恵燕編『鹿港才子施文炳』晨星出版有限公司、2016 年で紹介されている。

31) 羅君藍「鹿港旧祖宮湄洲天上聖母神符」。この匾額は旧祖宮に現存し、中央に「光緒御筆之宝」

の印が刻まれている。また史料には鹿港に開基媽祖像を贈った湄洲天后宮の住持である僧浄芳の名前があり、福建と鹿港の間で数年から十数年に一度の割合で「進香」の儀礼が行われたという。道光『彰化県志』も旧祖宮について「歳往湄洲進香」と述べている（巻5、祀典志、祠廟）。

32) 赤井孝史「戴潮春反乱における大甲の「神佑」」『園田学園女子大学論文集』47号、2013年。

33) 2023年7月訪問記録および「鹿港閣港永安宮碑記」（2005年）。また道光『彰化県志』には「王爺宮：一在鹿港港□（土＋乾）、乾隆己丑年（1769年）厦商公建」とあり、建設年代が異なる。また曽紹龍は彰化県城大西門街の忠烈祠にも祀られている（巻5、祀典志、祠廟）。

34) 鹿港城隍廟、文化資源地理資訊系統、中央研究院 (https://crgis.rchss.sinica.edu.tw/)。

35) 鹿港城隍廟、文化部・国家文化資産網 (https://nchdb.boch.gov.tw/)。

36) 2023年7月訪問記録および彰化県文化局「鹿港丁氏古厝」の解説。なお丁氏の宅内には「賜同進士」の匾額があり、右側に「光緒庚辰科殿試第三甲第四十八名」、左側には「欽点即用知県丁寿泉立」の文字が刻まれていた。

37) 2023年7月訪問記録。なお中央研究院台湾史研究所、台湾史檔案資源系統、鹿港丁家文書の解説によれば、その後丁家は鹿港辜家、基隆の顔家と婚姻関係を結び、日本統治下の台湾で一定の活躍を見せたという (https://tais.ith.sinica.edu.tw/)。

38) 司馬嘯青『台湾五大家族』玉山社、2000年。若林正丈『台湾抗日運動史研究』研文出版、1983年。

39) 2023年7月訪問記録と「西螺大橋：遠東第一大橋在台湾」国家発展委員会檔案管理局「檔案楽活情報」187期、2023年1月 (https://www.archives.gov.tw/ALohas/)。また地図の注記によると作者は謝百寿で、台北の美光芸術社が発行した（原件は未見）。

40) 2023年7月訪問記録。また楊朝傑「被遺忘的西螺信仰発展——如何在不断遷易的郷野找尋歴史真相」『聯合報』2019年2月19日。また維基百科、西螺福興宮を参照。

41) 維基百科、大甲媽祖遶境進香などの記載によると、戦後も大甲の媽祖巡行は北港をめざしたが、1984年に「大甲媽祖回娘家」という番組が放映されると、大甲の媽祖は北港から分祀したものという誤解が広がり、これに抗議した大甲側が北港への巡行を取りやめ、新港の奉天宮をめざすようになったという。

42) 2023年7月訪問記録。また李建緯主編『西螺福興宮「莫不尊親」匾研究』財団法人雲林県西螺福興宮、2022年。

43) 2023年7月訪問記録。またこの義勇の物語を題材とした絵本に黄漢偉、楊朝傑作、温詩云画『西螺的勇士』財団法人雲林県西螺福興宮、2022年4月がある。

44) 義民と言えば李直三、林爽文反乱の鎮圧に貢献した客家のそれが有名で、筆者も張丙の乱時に義民を組織した李受（鳳山県人）について検討したことがある（菊池秀明「太平天国前夜の台湾における反乱と社会変容」（塚田誠之編『中国における諸民族の移動と文化の動態』風響社、2003年、195頁。後に菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年所収）。また李文良『清代南台湾的移墾與「客家」社会 (1680–1790)』台大出版中心、2011年を参照のこと。

45) 「嘉義県境被匪拒守村莊簡明図説」道光十二年十一月十六日、国立故宮博物院蔵。またこの時葉長青の部隊は曽文渓で張丙軍の攻撃を受けて200名の死者を出しており、武器、火薬を奪われるなど自力で反乱軍の進攻を防ぐ力はなかった。

46) 李建緯主編『西螺福興宮「莫不尊親」匾研究』は西螺鎮で大きな勢力を振るった張廖氏一族の村落連合である「七嵌」について言及している。漳州系移民は鹿港を拠点とする泉州系の有力移民と対抗関係にあり、林爽文、戴潮春などの反乱指導者も多くが漳州系だった。彼らが清朝軍人か

ら与えられた匾額を廟に飾ったのは、自分たちが王朝政府から庇護されるべき存在であることを主張するものだったと考えるべきだろう。なおこの西螺張廖氏の「七嵌」は 1895 年の日本軍の進攻時にも頑強に抵抗したことで知られている。

47) 黄富三等編『霧峰林家之調査與研究』林本源中華文化教育基金会、国立台湾大学歴史系出版、1991 年、88 頁によると、林石は林爽文と遠い親戚関係にあったという。

48) 2023 年 7 月訪問記録。また維基百科、渓北六興宮および王得禄。

49) 姚瑩撰「王得禄行述」(台湾歴史文献叢刊『台案彙録』辛集、台湾省文献委員会刊行、1997 年、291 頁)。また『清史稿』巻 350、列伝 137、王得禄(中華書局版、1977 年、11257 頁)。なお王得禄は 1970 年代に中華電視台で放映された閩南語ドラマ『嘉慶君与王得禄』によって広く知られるようになった。また 2009 年、2022 年に放映された『嘉慶君遊台湾』でも王得禄が登場しているという。

50) 頼玉玲「梟雄蔡牽与水師提督王得禄的海上対決——従匾額観“蔡牽与王得禄”特展」『典蔵古美術』324 期、2019 年 9 月。なお王得禄は提督職を引退後、1832 年の張丙の乱では厦門で組織した義勇を率いて台湾へ戻り、反乱軍鎮圧に貢献した。また 1838 年にも嘉義県で発生した沈知の反乱を鎮圧した。彼が六興宮に匾額を贈ったのはこの後のことで、アヘン戦争期に姚瑩と台湾の海防に務め、1842 年に澎湖諸島の軍営で病没した。

51) 2023 年 7 月訪問記録。維基百科、王得禄。

52) 2023 年 7 月訪問記録。福康安紀功碑。なおこの碑文は元々赤坎楼の前に置かれた 9 つの碑文と一体のものとして作られたという。

53) 2023 年 7 月訪問記録。維基百科、福康安紀功碑および忠義十九公廟。

54) 2023 年 7 月訪問記録。また廟内には厳家淦、李登輝、陳水扁ら歴代総統のほか、陳立夫など国民党の有力政治家の匾額も飾られていた。

55) 駒込武「植民地教育と異文化認識——「呉鳳伝説の変容過程」(『思想』802 号、1991 年 4 月)、同「呉鳳伝説の改編過程」(『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996 年所収)。下村作次郎『「呉鳳」関係資料集一・二』(日本統治期台湾文学集成 26、27, 緑蔭書房、2007 年)。同「「義人呉鳳」の誕生地・諸羅県(嘉義)——呉鳳物語の生成」(『中国文化研究』28、2012 年)。宮岡真央子「呉鳳をめぐる信仰・政治・記憶」(『台湾原住民研究』17、2013 年)。陳其南「呉鳳的神話」「再論呉鳳」「歴史的断層与摺曲——呉鳳、連横与日本人」(『文化結構与神話——文化的軌跡』上冊、允晨文化、1987 年)。

56) 陳盛韶『問俗録——福建、台湾の民俗と社会』114 頁。

57) 呉密察監修、横澤泰夫訳『台湾史小事典』増補改訂版、中国書店、2010 年、67 頁。郁永河『裨海紀遊』巻下は康熙年間の通事について、「郡県有財力者、認辦社課、名曰社商。社商又委通事夥長輩、使居社中、凡番人一粒一毫、皆有藉稽之……。内地犯法奸民、逃死匿身於僻遠無人之地、謀充夥長通事、為日既久、熟識番情、復解番語、父死子継、流毒無已む。彼社商者、不過高臥郡邑、催餉納課而已」とある。また 18 世紀中頃に台湾を視察した観察御史の徐澍が描かせた『番社采風図』渡河も筏に荷物を積み、清朝官員の出で立ちで土目と共に川を渡る通事の姿が描かれている(杜正勝撰『番社采風図題解——以台湾歴史初期平埔族之社会文化為中心』中央研究院歴史言語研究所、1998 年。なお通事と非合法の冒険商人である番割の関係については黄淑美『台湾移住民社会の研究』汲古書院、2017 年を参照のこと。

58) 伊能嘉矩『台湾文化志』下冊、第 15 編、番政沿革、第 3 章、番人に対する課租。

59) 陳盛韶『問俗録——福建、台湾の民俗と社会』115 頁。

60) 陳盛韶『問俗録――福建、台湾の民俗と社会』124 頁。

61) 2023 年 7 月訪問記録。ただし呉鳳一族の土地所有額については異論がある。鄭蛍憶「通事制度、信仰与沿山辺区社会―清代台湾呉鳳信仰的形成」(『歴史人類学学刊』12 巻 2 期、2014 年)によると、呉鳳の子孫は林爽文反乱の鎮圧後、清朝が行った漢番交界の再設定を利用して所有地を拡大した。19 世紀前半の契約文書は彼らが嘉義県城内の米街巷の土地、阿里山番租の地である番仔潭の耕地などを所有していたことを伝えており、この時彼らの行動を支えたのが呉鳳神話であったという。

62) 邱奕松編『呉鳳成仁二百年紀念専輯』嘉義県紀念呉鳳成仁二百年籌備委員会、1968 年(筆者は未見)。また維基百科、呉鳳を参照のこと。

63) 汪明輝編『96 年度原住民族伝統領域土地調査後続計画成果報告Ⅰ』行政院原住民族委員会委託、鄒族文化芸術基金会執行、2007 年、130–143 頁。

64) 宮岡真央子「台湾原住民ツォウの旧〈獵場〉における土地権」『日本台湾学会報』3、2001 年 5 月。

65) 温貞祥口述、維基百科、呉鳳。なおこの部分について脚注では胡台麗〈呉鳳之死新説〉があがっており、胡台麗「呉鳳之死」『台湾文藝』革新号、第 17 期、1980 年 10 月を指すと見られるが、未確認。また下村作次郎「台湾原住民文学序説」『天理大学学報』45、1994 年 2 月も胡台麗の作品を高く評価している。

66) ちなみに原住民民族運動が高まった 1988 年に嘉義駅前にあった呉鳳の像は破壊され、翌 89 年 1 月には呉鳳廟の陳列室も被害を受けた。現在呉鳳廟には「改修呉鳳廟碑記」(1931 年)などいくつかの碑文が残っているが、中には表面が削られて文面を読み取れないものもあった。

67) 2023 年 7 月訪問記録。また鄭蛍憶「通事制度、信仰与沿山辺区社会――清代台湾呉鳳信仰的形成」を参照のこと。

68) 水沙連は台湾中部の「内山」地区に対する総称で、現在の南投県および日月潭一帯を指す。1847 年に閩浙総督の劉韵阿は水沙連社に対する調査を行い、封禁を維持することが決定されたが、結局のところ「内山」に対する開発は続行され、19 世紀後半になると「開山撫番」政策が採られるようになった。

69) 調査終了後まもない 2023 年 8 月に多摩大学の水盛涼一氏の主催する研究会にて本稿の内容をお話しさせていただく機会があり、席上金美徳教授(多摩大学大学院経営情報学研究科)から呉鳳伝説の本質は公権力による「滅私奉公」の強制にあるとの指摘を頂いた。ここに記して感謝したい。